

2025年(令和7年)2月4日(火曜日)

商いの新しいものさし

（株）創研研究所
代表取締役

松本 大地

第170回

あいりん地区周辺で煌めくOMO7

昨年の宿泊先で一番印象深かったのが、2022年にJR大阪環状線と南海電鉄が乗り入れる新今宮駅前に開業した「OMO7大阪by星野リゾート」だった。OMOは面白い、おもてなしの意味を含み、宿泊客に街探訪してもらうホテル業態。提供するサービスや設備グレードにより、OMO3、OMO5、OMO7などがあり、7は1つの都市に1つだけ展開する最上級のフルサービス施設。星野リゾートが

新今宮駅にて最上級サービス業態でかつ436室の大型ホテルを開業した背景と、周辺の地域価値を上げている実態に驚きを覚えた。

ホテルと新今宮駅の線路を挟んだ南側地域は、戦後復興からの高度経済成長期に土木や建築作業に関わる日雇い労働者の流入が進み、以前は金ヶ崎、現在はいりん地区と呼ばれている。周辺には宿を逆から読んで通称ドヤと言った簡易宿泊所が建ち並び、路上生活者

や昼夜問わず酔客も目立ち、近隣には日本最大級の遊廓と称された飛田新地もあって、決して治安の良い場所とは言えないエリアである。

OMO7大阪前の1万4000㎡という大きな敷地は、1917年から中山太陽堂（現・クラブコスメチックス）が大型化粧品工場を操業していたが、76年に撤退後には大阪市の所有地になった。市は駅前の空き地を地域活性化に活用したいと募集したが長年実ら

ずだったところ、2017年に星野リゾートが応募し、18億円で購入した。JR大阪環状線駅前、また大阪メトロ動物園前駅、大阪南部のタミナルの天王寺駅や通天閣から徒歩圏内にある立地にも関わらず、他の大阪の繁華街と比べて治安などの理由で敬遠されていた背景があった。筆者の換算では星野リゾートは坪当たり42万円の取得価格であり、難波地区の10分の1、近隣の天下茶屋の半額以下とかなり格安だったと言える。

広大な土地を格安で購入した結果、「みやげりん」と名付けられた7600㎡の広大な芝生広場をつくることができた。敷地面積の半分が広場という大胆な発想が奏功し、散策だけでなくデッ

キテラスやバーベキュー設備もあり、子供が大きなシヤボン玉で飛び跳ねる光景が広がり、夜になれば音楽とともに提灯を灯した屋台からたき火や地元クラフトビールが

それを証左するのが、20年ぶりに訪れた新世界エリアのジャンジャン横丁だった。OMO7大阪からジャンジャン横丁までは徒歩4分で、途中のドン・キホーテ前には若い女性客やカップル、外国人旅行者が集まり、その賑わいがジャンジャン横丁で大きな塊になる。串カツなどの大阪の味を気軽に食し、射的などの大衆娯楽を楽しむ人々で毎晩が縁日のような横丁に変わっていた。

先日、ニューヨークタイムズの「2025年にいくべき52カ所」が発表されている。

され、富山市と大阪市が選出された。また新世界の往年のシンボルである通天閣が南海電鉄の子会社になると報道された。通天閣が令和時代の新たなランドマークとなつて、周辺が個性あふれるワクワクする街の光を放つことを期待したい。親しみやすい雰囲気店舗が多い当該地は、日本に未成熟な都市のナイトカルチャーを広げる好機になるだろう。

さて、どの国どの街であつても、治安の良くない場所は家賃が安く、そこに若者が起業しアーティストが移り住んで街が活性化していく。その可能性を、星野リゾート経営者である星野佳路氏は匂いを感じたのだろう。ホテル事業だけの個のビジネスで終わるのではなく、「街を1つの事業体と捉え、街の全体価値を高めること」が決め手だった。トップに立つリーダーには「商いの知恵と才覚」が不可欠だと見せ付けられた。

考えれば、大阪は古くから商業を中心として発展してきた「商都」である。OMO7大阪には商才のエッセンスが詰まっている。

OMO7大阪前で写真を撮る若い女性（左）客層が変化したジャンジャン横丁



①OMO7大阪前で写真を撮る若い女性 ②客層が変化したジャンジャン横丁